

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 優秀賞 受賞作品

『日常に埋もれた宝物』

千葉県
学習院女子高等科
二年 金 允斐

日常に埋もれた宝物

学習院女子高等科 二年
金 允斐(きむ ゆんぴ)

私が生まれ育ったまちは何もかもが普通で、特別なものなどないように思えた。都会のように華やかな場所もなければ、観光名所として知られる場所もない。日常に追われ何気なく過ごしている私は、まちに対するありがたみをあまり感じることなく過ごしていた。しかし、普段の生活の中で感じることはない、当たり前だと思っていたものがかけがえのないものだと思付かされることがある。私のまちを表す言葉として真っ先に思い浮かぶのは「静謐」だ。静かな空気が流れている中にこそまちの本当の魅力が隠れている。

私のまちは都会の喧騒から一步離れた場所に広がっている。古びた町並みや静かな通りには穏やかで落ち着いた雰囲気漂っている。特に、冬の朝の通学路を歩く時の景色は心に残る。通りに人影はほとんどなく、空気はひんやりといて薄暗いため、一步一步踏みしめるたびに心が落ち着く。まちの静けさがまるで私だけの秘密の世界に引き込んでくれるようで、何とも言えない安心感を与えてくれる。静謐とは、ただ静かなだけでなく心の中に広がる穏やかな時間のことを指すのだと思う。私のまちにはその静謐さが至る所にあふれている。これは忙しい日常の中で、ふとした瞬間に感じられるもの。例えば、学校の帰り道、夕暮れ時の空が真っ赤に染まっている時。周りは静かで、木々が風に揺られる音がする。このような何気ない瞬間にまちの静謐さが身に染みる。

まちを歩くと古くからの建物が目に留まる一方で、少しずつ新しいビルや商業施設が増えてきていることに気付く。新しい店がオープンし、昔からの町並みに新たな風が吹き込まれる。そのたびにまちに少しずつ活気が生まれ、日常の中でふと感じる小さな喜びを増やしてくれる。また、新しくできたカフェやレストランがいつの間にか馴染みの場所になっている。こうした変化は決して派手ではないが、町の経済が静かに動いていることを感じる瞬間だ。さらにまちの住宅地も少しずつ発展している。新しい家が建てられ、家族が引越してくる。静かな通りには昔ながらの家と新しい家が立ち並び、それがまち全体のバランスを保ちながら成長を支えている。ただ単に新しいものが生まれるだけでなく、過去と現在が調和しながら、未来へとつながっていくのだなと感じた。

このまちの静謐さは、一見すると何も変わらないように見えるが、その中で経済は着実に成長している。静謐さと経済は一見、相反するもののように思えるが実はお互い支えあいながら共存していると思う。目に見えない変化がまち全体に広がり、日々少しずつ確実にまちを豊かにしているのだ。静けさの中での成長は、普段の生活では気付かないかもしれないが、その恩恵は私の生活のいたるところに広がっている。私はまちの静謐さを日々の生活の中で当たり前のものとして捉えてしまう。だが、その価値を再確認することで、そのありがたみを深く感じるができる。普段の慌ただしい生活の中でまちの静かな風景や自然の美しさに目を向けることで、その静けさがどれほど貴重であるかを知ることができるのだ。私が見過ごしてしまったまちの魅力は日々の生活をより豊かにしてくれていると思う。こうした気づきはまちに対する愛着を深め、その静謐さを大切に作る気持ちを育むことにつながると思う。